

症例検討会

H23.8 羽島店

患者

70代 男性 喘息 腰痛 狭心症

定期処方

- ① バファリン A81 1T
タケプロン OD15 1T 分1朝食後 14日分
- ② クラリス 200 2T
オノンカプセル 112.5 4C 分2朝、夕食後 14日分
- ③ アドエア 100 ディスカス 28 吸入 1キット
- ④ ホクナリンテープ 2mg 14枚
- ⑤ ロキソニンテープ 100mg 28枚
- ⑥ ニトロダーム TTS 25mg 14枚

H23.3.18 来局 言葉が出にくく、どもるため紹介状を書いてもらい市民病院でCT検査をされるとの事。 Do 処方

H23.4.1 来局 CT検査は異常無かった。症状続く。 Do 処方

H23.4.15 来局 症状続く。 Do 処方

H23.5.6 来局 症状続き、食事がとりにくくなり、頬の筋肉がうまく動かない。
処方追加 プロマック D75 2T
メチコバル 250 2T 分2朝、夕食後 14日分

H23.5.20 来局 症状続く。 前回 Do 処方

H23.6.3 来局 症状続く。 前回 Do 処方

H23.6.17 来局 娘さん代理。飲み間違いがあるため今回から薬の一包化希望。
症状続く。 前回 Do 処方

H23.7.1 来局 症状進行している。咳はおさまっているためアドエア吸入カット。

H23.7.15 来局 娘さん代理。症状が進行しているため近所の町医者で診察。
原因がわからないが、VB12の大量投与が有効かもと言われ
今日、主治医に相談してみたが、あまり効果ないのではとの判断で
メチコバル 250 2T 継続処方。大学病院で検査入院される。

H23.8.10 来局 娘さん代理。大学病院でALSと診断されたとの事。
病床が空き次第、手術されるとの事。定期薬を持って
入院される。Drより手術前はバファリン中止の旨説明あり。

-筋萎縮性側索硬化症とは-

筋萎縮性側索硬化症 (ALS) とは、手足・のど・舌の筋肉や呼吸に必要な筋肉がだんだんやせて力がなくなっていく病気です。しかし、筋肉そのものの病気ではなく、筋肉を動かし、かつ運動をつかさどる神経 (運動ニューロン) だけが障害を受け、脳から「手足を動かせ」という命令が伝わらなくなることにより、力が弱くなり、筋肉がやせていきます。体の感覚や知能、視力や聴力、内臓機能などはすべて保たれることが普通です。

-診断基準-

針筋電図

筋肉に直接細い針をさし、筋肉が神経にどのように支配されているかを確認する検査です。ALSでは神経原性変化(high amplitude, long duration など)、脱神経所見(positive sharp wave、fibrillation など)などが認められます。

髄液検査

腰から針をさし、脳・脊髄周囲に存在する髄液を採取し検索します。ALSでは一般的には正常ですが、一部の患者様でタンパクが上昇することがあります。

-治療法-

リルテック錠50 薬価 1701.5

効能又は効果

筋萎縮性側索硬化症(ALS)の治療

筋萎縮性側索硬化症(ALS)の病勢進展の抑制

通常、成人には本剤を1回1錠、1日2回(朝及び夕食前)1日100mg(本剤2錠)を経口投与する。

-対症療法-

1) ALSにともなって起こる筋肉や関節の痛みに対しては毎日のリハビリテーションがとても大切です。

2) 体の自由が効かないことや、病気に対する不安等から起こる不眠には睡眠薬や安定剤を使います。

3) 呼吸困難に対しては、鼻マスクによる非侵襲的な呼吸の補助と気管切開による侵襲的な呼吸の補助があります。

4) のみ込みにくさがある場合には、柔らかく水気の多いもの、味の淡泊なもの、冷たいものが嚥下しやすい。少量ずつ口に入れて嚥下する、顎を引いて嚥下するなど摂食・嚥下の仕方に注意することが有用です。飲み込みにくさがさらに進行した場合には、お腹の皮膚から胃に管を通したり(胃ろう)、鼻から食道を経て胃に管をいれて流動食を補給したり、点滴による栄養補給などの方法があります。

-病気の経過-

この病気は常に進行性で、一度この病気にかかりますと症状が軽くなるということはありません。体のどの部分の筋肉から始まってもやがては全身の筋肉が侵され、最後は呼吸筋も働かなくなって大多数の方は呼吸不全で死亡します。人工呼吸器を使わない場合、病気になってから死亡までの期間はおおよそ3~5年ですが、中には人工呼吸器を使わないでも10数年の長期間にわたって非常にゆっくりした経過をたどる例もあります。その一方で、もっと早い経過で呼吸不全をきたす例もあります。特に高齢者で、話しにくい、食べ物がのみ込みにくいという症状で始まるタイプは進行が早いことが多いとされています。重要な点は患者さんごとに経過が大きく異なることであり、個々の患者さんに即した対応が必要となります。